



秋元雄史がゆく、九谷焼の物語

LIBRARY

九谷の技術を引き継ぐ教育の場

第一話

“技法”と“伝承”をキーワードに、九谷の魅力を、系譜を紐解きながら探る本連載。
第一話は開設以来、多くの作家や職人を輩出している「石川県立九谷焼技術研修所」を訪問。「古九谷写し」と「型打ち成形技法」の授業にお邪魔しました。

「LIBRARY 秋元雄史がゆく、九谷焼の物語」とは

長い歴史に育まれてきた九谷焼の「技」は、いかに生まれ、今後どのように変化していくのでしょうか？KUTANism総合監修・秋元雄史が自らその現場に足を運び、ナビゲーターと対話をするなかで、九谷焼を再発見していく連載シリーズ。

Starting out as raw pottery stone, they are painted, and eventually served at traditional ryotei restaurants. Just how exactly did such Kutani ceramics come to be, and come to be used? Through this mini-series, rediscover the origins and evolution of Kutani ceramics, with KUTANism supervisor Akimoto Yuji as your on-site guide.

WEB版はこちら /





#01

九谷の技術を引き継ぐ教育の場

華やかな九谷焼をかたちづくる多くの「技」は、いかに生まれ、どのように展開し、そして受け継がれているのでしょうか。KUTANism全体監修・秋元雄史が自ら現場に足を運び、ナビゲーターと対談をするなかで九谷焼を再発見していく連載シリーズ「秋元雄史がゆく、九谷焼の物語」。

2020年度は「九谷焼はいかにして生まれ、使われてきたのか」をテーマに、陶石の採掘現場から、花形である上絵付の工房、さらに九谷焼が実際に使われる料亭まで、九谷焼にまつわる様々な場所を訪ね歩きました。九谷焼の魅力は様々な技法を駆使して多彩な様式を生み出し、個性的な磁器生産を時代の変化に合わせて行なってきたことにあります。2021年度は“技法”と“伝承”をキーワードとして、九谷の魅力、系譜を紐解きながら探っていきます。

第一話は昭和59年の開設以来、多くの作家や職人たちを輩出している「石川県立九谷焼技術研修所」を訪問しました。今日の学びの中心地である研修所は「将来の九谷焼を担う人材を育成する」ことを目的として、九谷をはじめ陶芸に関する実技と理論を効率的に学べるカリキュラムを編成。幅広い分野から第一線で活躍する一流の講師を招き、質の高い指導で評判です。本科、研究科、実習科の三学科からなり、初心者向けの基礎知識から九谷焼産業従事者を対象とした専門的な技能習得までの様々なカリキュラムを展開しています。前半は研修所の技術指導課長の藤原元先生に研修所の概要について教えていただき、後半は学生の技法習得の様子を見学。「古九谷写し」の山中國盛先生、「型打ち成形技法」の山本篤先生の授業におじゃましました。

目次

- ✓ 時代の変化と共に重要度を増す、次世代に九谷の技術を伝える場所。
- ✓ 九谷焼の「絵」の大切さを、古九谷を写すことから学ぶ。
- ✓ 今では失われつつある「型打ち成形技法」を指導。
- ✓ この回のまとめ



案内してくれた人

藤原 元 先生(石川県立九谷焼技術研修所 技術指導課長)

九谷の地で生まれ育ち、父が九谷焼の絵付けを仕事としていたことから、幼い頃から窯詰めや窯出しを手伝ったり土に触れたり作陶したりするなど九谷焼に親しむ。金沢美術工芸大学を卒業後、昭和63年から石川県立九谷焼技術研修所の職員として後継者育成と新商品開発事業に携わる。モットーは「卒業生は研修所の名刺」「卒業生が九谷焼(業界)を作ってゆく」。

時代の変化と共に重要度を増す、次世代に九谷の技術を伝える場所。



秋 元： 研修所の設立趣旨を教えてください。研修所が設立した昭和59年頃は、九谷焼の業界が相当元気だった頃ですよ。さらに発展させていくために、こういう場所を作って盛り上げていこうということだったのでしょうか。

藤 原： 研修所ができる前は、九谷の組合が後進を育成するために学校のようなものを開いて、定期的な講習を行っていたと聞いています。その後、九谷焼の産地から要望を受けて、石川県が九谷焼の振興と後継者育成のために開設したのがこの研修所です。昔は徒弟制度のようなものが若干残っていて、「九谷を学ぶなら、まず偉い先生に入門する」という職人気質の世界だったんですよ。それから次第に研修所の評判が広まって、今では九谷焼を志す人たちが、はじめに門を叩く場所となったわけです。



秋 元： 卒業後は就職される方がほとんどなのですか？

藤 原： 研修所としては九谷焼の業界に若い人材を送り込むというのが趣旨ですので、なかには卒業後すぐに自宅の一角に工房を構える人もいますが、まず就職する学生の方が多いですね。これまで、累計1300人以上の卒業生・修了生を送り出していますが、そのうちおよそ7割が県内外で焼きものに従事しています。卒業生への支援も様々行っていて、隣接する場所には、独立をサポートする2つのレンタル工房、「県立九谷焼技術者自立支援工房」と「能美市九谷焼美術館・職人工房」があります。



ロビーには、研修生の卒業制作が展示されている。

藤 原： 本日は今年入学した一年生たちが学ぶ本科の「古九谷写し」と、研究科の「型打ち成形技法」をご覧くださいと思います。「古九谷写し」の実習は山中國盛先生、「型打ち成形技法」は妙泉陶房の山本篤先生にお願いしています。実際に九谷焼の業界で長く仕事をされている先生方を講師に招いています。

秋 元： なるほど。ちなみに研修生の中には一度就職してから改めて勉強する人はいるのでしょうか？さらに技術力を向上したいですか。

藤原： そうですね。特に「実習科」は石川県内において陶磁器生産に就業している方が対象となっており、加飾専攻と造形専攻からなる2つのコースで、より専門性の高い技術を習得するカリキュラムとなっています。



九谷焼の「絵」の大切さを、古九谷を写すことから学ぶ。



「古九谷写し」の担当講師を務める九谷焼作家の山中國盛先生。日展や現代工芸美術展などで古九谷様式を基にした作品を発表してきた。古九谷様式は文化勲章受章者の二代目・浅蔵五十吉に学んだ。



器にデザインを転写した上から、丁寧に絵付けをしていく。

藤原： ここでは山中國盛先生の指導のもと、今年入学した学生たちが「古九谷写し」を学んでいます。この授業は本日が最終日となります。

秋 元： 古九谷写しの授業は、全部で何回あるのでしょうか？

山 中： 毎週月曜から金曜の午前中に授業があって、だいたい20回くらいですね。生徒の中には、2枚目の器に取り掛かっている人もいます。人によって手の速い遅いもありますし、美術経験者もいれば、そうでない人もいますので、それぞれの生徒にあった進め方をしています。



今年4月に入所した学生は全14人。年々、女性の比率が増えている。

秋 元： 相当な回数を重ねて、ここまで辿り着いているんですね。流れとしては図柄を写すところからはじまり、器の中に転写して色を載せていく手順で、まずはダイジェストで一度経験してみるってことでしょうか。

山 中： 生徒たちにとって、4月に入所してからこれだけ長い時間をかけて行う授業は初めてになりますね。それ以前に基本的な筆の扱い方などを勉強しますが、学生たちは古九谷写しの授業で、豪快な構成で彩色が重厚な九谷の特徴を一連の技術習得を通して学びます。私たちとしては、ただ経験するのではなく、いずれは一人一人が自信を持って、九谷というものをこの地でやっていけるようになればいいなと思って指導しています。

秋 元： まずは九谷焼のおもとしてある古九谷から学ぶということですね。いま授業で教えている技法と当時の古九谷の技法との違いはあるんですか？



山 中： 基本的に同じだとは思いますが、現代では全ての作業が洗練されていますから、それと比べると当時は色々な意味で試行錯誤の時代だったと思います。例えば発掘された古九谷を見たときに、技法の完成度という観点だけで見比べれば、実は、なかなかまともだと言えるものがないんですよ笑。粘土の作り方も現代ほど洗練されていないですし、それから生掛け(※)であるという感じなので、上絵付けが剥離というか起き上がるなどしてしまうんです。

山中： 現代では素焼きをしてから本焼きをした後に上絵付けをするという工程ですので、そのようなことは起きないのですし、様々な工程の完成度が異なっています。（※）成形したまま、素焼しない素地に釉薬を掛けること



古九谷写しの授業で使用している作品。

秋元： ここで教えている古九谷写し、いわゆる古九谷様式の制作方法についてですが、研修所で皆さんに教えられるように安定した技法として完成度が増し体系立ったのは、いつ頃だったのでしょうか。

山中： 我々の時代、私がちょうど大学を出た頃なので昭和52年頃になりますが、当時はこういった学びの場がなかったものですから、私は二代目・浅蔵五十吉に弟子入りをして、九谷の全般を教わりました。その浅蔵先生の師匠である初代・徳田八十吉は古九谷、吉田屋の青手に惹かれて九谷五彩の研究に没頭し多くの釉薬の開発した人物なのですが、浅蔵先生は初代・徳田八十吉に付いて修行する中で、古九谷や吉田屋風な深い色絵の具の扱い方を学んでいます。初代徳田八十吉は、明治時代に古九谷から吉田屋へと続く古九谷様式の再生に生涯をかけて研究して再現しています。そして、その弟子である二代目・浅蔵五十吉は、それを基にして青手古九谷や吉田屋風の緑、黄、紫を基調とした作品をつくっています。私は二代目・浅蔵五十吉から学んだ内容を、研修所開設当初の昭和59年から「古九谷写し」の授業で伝えているわけです。

秋元： すると再興九谷と呼ばれた時代に再現された古九谷の青手と、山中先生が学生さんたちに教えているものは、いまでもそんなに変化していないということでしょうか。

山中： 基本的には同じものだと思います。

秋元： つまり学校教育用に合理化したり簡略化したりしているってことはなくて、初代・徳田八十吉らがああでもないこうでもない再現して体系立ててきたものを、そのまま取り入れているということですね。



山中： 二代目・浅蔵五十吉は子どもの頃に父から素地を教わり、その後、初代・徳田八十吉に師事して九谷を学びました。その技術を基に、さらに、近代的な色絵の名工である北出塔次郎(きたでとうじろう)に就いている。ですので徳田と北出、両方のエッセンスというのを持っているんです。そこに今度は、自分自身の新たな解釈や表現方法を加えて独特の世界をつくられた。それが認められて文化勲章を取られ、九谷焼業界の重鎮として後進の指導にも力を注ぎました。その後を私が引き継ぎました。

秋元： 初代・徳田八十吉から二代目・浅蔵五十吉へと続く中で、技法としての古九谷様式のさらなる発見や完成があった。作家個人がまずその価値を見出し、直に学んで、技を引き継いできたということ。そして、それらの発見の恩恵を今では多くの職人や作家が受けているということですね。



秋元： 古九谷写しの制作のプロセスで最も掴むべきポイントって何でしょうか。

山中： 色々ありますね。技術面では、まず運筆や構図の見方などを学び、それから実際に器の曲面に合わせて墨書きをして、濃淡を付けながら上絵付け(※)をしていきます。それから古九谷というものの価値の捉え方ですね。現代の造形や絵画などと照らし合わせて、当時の古九谷は本当に美術と言えるのかとか、この時代にこんな技法ができるんだとか、どんなことを考えてこの図案にしたのかとか、そういったことを皆さんと一緒に考えていくなかで、各々がそれぞれの発見ができるようにしています。

(※)「九谷五彩」と呼ばれる、緑(青)・黄・紫・紺青・赤の色絵の具を自在に活用して絵付けするスタイルのこと。5色の色絵の具をフル活用することから、「五彩手」とも呼ばれる。

秋元： 今度は生徒の皆さんに話を聞いてみたいと思います。研修所に入ってきた動機や実際に古九谷を写してみた感想があれば教えてください。



「古九谷写しの授業で、色絵そのものの見方が深まった」と言う。

生徒： 私は神奈川県出身なのですが、転勤でたまたま石川に来て九谷を知りました。もともと伝統工芸品は身近じゃなかったけど、石川って工芸がすごく身近じゃないですか。そこに魅力に感じて、だんだん九谷焼を好きになって、自分でもやってみるかと思ってここに来ました。



敷地内にある錦窯(色絵付窯)。古九谷写しの授業で制作した器を焼成する。



講師で加賀市・妙泉陶房の山本篤さん。1975年に兄・長左さんと二人で創業。伝統技法を大事にして正確な継承に力を注ぐ。型打ち成形技法は、ろくろと型打ちの両方の技法を理解してはじめて使い心地の良い、軽く丈夫な器ができる。授業では繰り返し訓練することの重要性も伝えている。

秋元： まずは型打ち成形技法について、基本的なところから教えていただけますでしょうか。

山本： 型打ち成形技法は江戸時代、17世紀初頭に生まれた技法で、輪花皿や八角鉢などの非円形の面取の器や、さらにその上に陽刻文様などを施すことができる手の込んだ技法です。一手間も二手間もかかっているわけですから、富裕層の需要が高い高級なものだったんですね。昔は殿様などに献上する際の磁器として重宝されました。技法的には有田から来たという説や、その他にも諸説があるのですが、今となっては型打ち成形技法は日本全国を見ても石川県の九谷焼に一番残っているんです。制作方法ですが、まずつくりたい形の雌型となる素焼きの型を作ります。そこにろくろで薄く引いた生地をのせて、上から押し当てて形を成形していく。ろくろ引きだけではできない、ひと手間かかった成形方法で、より高い技術も必要となります。



授業で使用している素焼きの型。ろくろ成形だけではできない複雑で繊細な形を作り出せる。

秋元： なぜ他では無くなってしまったのでしょうか？

山本： 理由の一つは、低コストの量産品が求められた時代に非効率ということで淘汰されてしまったということが大きな要因ですが、九谷の磁土が型打ち成形技法に適していたという事情も大きな要因ですね。非効率ですが、いいものを引き継いできた九谷の風土が関わっています。型打ち成形技法をするためには磁土がそれに適していないとできないわけですが、九谷の磁土はそれに向いたものを制作してきたのです。その理由は磁土の製造方法にあるのですが、

山本： 九谷では花坂陶石をスタンパーという機械で碎くのです。その方法だと丸以外に三角とか四角とか、いろんな形の粒子が混ざって、ろくろで引いたものを曲げるときに耐えられるだけの粘り気や強度があるんです。ただスタンパーは陶石を碎くのに時間がかかるため、大量生産には向かない。しかしこの磁土がないと、型打ち成形技法はできないのです。



秋元： 業界としては生産量が少ないし手間がかかるから、全国的に型打ち成形技法を用いるところが減っていったということですか？

山本： そうですね。ただ型打ち成形技法の良いところは、小ロットでもオリジナルの形ができるのでお客様の満足度が違うんです。近年は、この技法が見直されてきているんですよ。手に取って見てもらえれば分かりますが、ぎゅっと機械で圧をかけて作ったのは密度が濃いもんで、同じ大きさで同じ厚みでも重たい。けど型打ち成形技法で作ったものは、中に空気層があるのでずいぶん軽く感じるんです。やっぱり人間っていうのは感覚が大事ですね。

秋元： 触るものですからね。

山本： 手に取った感じとか、重さのバランスとか。同じお皿でも、どこに重心があるかによって重く感じたり軽く感じたり、持ちやすかったり持ちにくかったりというのがあるんですよ。僕は人間の感覚で作ったものは、人間の感覚に受け入れやすいと思っています。機械で作ったものとの違いが、使っていけばいくほどわかるんです。



秋元： なるほど。本当にそのとおりですね。触ってみて初めて分かるのが工芸です。素焼きの型は毎回新しいものを作っているんですか？

山本： いやいや、うちでは一番古い型は200年前に作ったものがあります。

秋元： あ、そんなに古いものですか！だいたい何度くらいで焼かれたものなんですか？

山本： 登り窯で焼いてるもので、素焼きよりもちょっと温度が高い950度くらいですかね。それ以上温度を上げると、水分を吸わなくなってしまうんです。型を打っているあいだに表面の水分を吸ってくれるので、上から押し付けた型が抜けると。それから、型が欠けると困るので。石膏だって欠けてくるでしょ。素焼きの型っていうのは、ゆっくり中まで焼き込んであると割れない限りは200年くらい持ちますね。

秋元： なるほど。水分を適度にとって抜けてもらわなくちゃ困るから、素焼きのものでないってことか。



生徒たちは、熟練した技術を間近で見て学ぶ。

山本： じゃあ、手本にろくろを引いていきますね。あのね、みんなろくろを引くときは、あまり硬さって意識してないだろうけども、この硬さによって同じ粘土の量でも作れる大きさが変わってくる。だから、いかに自分の手にあった粘土の硬さにするか、それから常に一定の硬さにできるかが大切だね。この技法を使ったらどんなデザインができるんだろうというのを、想像できるようになるために技術を学ぶ。何回かやるだけで習得はできんから、とりあえず将来の自分のために、デザインを起こすために技法としてまず勉強するのが大事やね。



秋元： みなさんは一応、ろくろの経験はあるんですか？

山本： 三年目なので、ある程度はできます。ただ研修所ではろくろだけじゃなくて色んなことを勉強しているので、広く浅くという感じです。これからの時代は、やっぱりいろんな技法を覚えながらオリジナルのデザインも生むってのも大切やね。作家を目指すのならば、ろくろの世界でも絵付けの世界でも、飛び抜けてないと生き残れない。その辺をどう考えるのかを学んでもらうのが、研修所の役割だと思うんですよね。

秋元： その通りだなと思って。ちなみに個人の能力はどのように評価されますか？向き不向きというのはあるのでしょうか。

山本： 九谷は成形や絵付けもあれば販売も問屋もあるので、一人ひとりと話し合いながら、手先が器用な人はこっとか、造形が得意な人はあっちとか、業界の中で向き不向きに合わせてそういったことができますよね。

秋元： そっか。そこまで幅広いと何らかの形で適性が見つけられるってことか。それは非常に働きやすい環境ですね。その辺はやっぱり、産業としての九谷というか、みんなが何らかの形で九谷を仕事として、いかに食べていける環境をいかに作るかってところですね。



「10年後には作家として独立したい」と前向きに語ってくれた。

秋元： 生徒さんに話を伺ってみたいと思います。皆さんは、どんなことを習得したくて、またどんなことを期待して学んでいるのでしょうか。

生徒： 将来は作家になりたいと思っています。せっかく素晴らしい先生に教えていただけるので、少しでも将来に向けて勉強したいって一心です。最初のほうは指導されるまま、とりあえずやってみるって感じだったんですけど、今はちょっとずつ、やりたいこととか見えてきていて、それが面白いですね。

この回のまとめ

ここを卒業した累計1300人以上の人たちが、九谷焼に関わる活動をしなが業界を支えている。第一線で活躍する作家や職人たちを講師として招いた生きた学びの場となっており、卒業後、ここで出会った講師のもとで仕事を続ける人も多いという。技術伝承と新たな試み、この二つが両立して九谷の多様性を育んでいる。これまで受け継がれてきた技術を守ること、そして自らの表現を生み出すという一見矛盾しそうな取り組みが併存しているところが研修所の最大の特徴だ。

Techniques for creating individuality



<https://kutanism.com>